

画家・丸木位里と
飯室の芸術家たち



まるきいり いむろ げいじゅつか
丸木位里と飯室の芸術家たち

広島市安佐北区安佐町飯室は、たくさんの芸術家が生まれ育った町です。この冊子では、画家・丸木位里を中心に、彼とかかわりのあった同じ飯室出身の芸術家たちについてご紹介します。ここでは、丸木位里と飯室の芸術家たちの関係性をまとめています。

位里の母
丸木スマ

詳しくは
14~17
ページ



「絵というものがどういうものであるか、ということ、母の絵で教えられ、感じるわけです。」
(『丸木スマ画集・花と人と生きものたち』より)

位里と家族



丸木位里

飯室出身の日本画家。
『原爆の図』で世界に知られる。
妻は画家・丸木俊(赤松俊子)

詳しくは
6・7
ページ

絵描き仲間
中谷ミユキ

詳しくは
8・9
ページ



「東京には中谷ミユキさんがいます。私より一つか二つ上だが御本人は私を同級生だとガンバっています。」
(『いむろ』(飯室小学校百年誌)より)

さんばがらす
飯室の三羽鳥

「山ばかり描いて、見た目と一分一理違わないように山を描いたり、樹を描いたりして、大変いい絵だった。」
(『流々遍歴』より)



絵描き仲間
佐々木邦彦

詳しくは
10・11
ページ



位里の妹
大道あや

「お前の絵はいかにへたに描いて、いかにつっこむかにあるんじゃ。何も教えることはありませんよ」
(『へくそ花も花盛り』より)

詳しくは
12・7
ページ



丸木スマ
(1875-1956)

飯室の有名人

丸木位里と大道あやの母である、丸木スマもまた、飯室で花開いた画家の一人でした。飯室の丸木家に嫁いですがすぐのうちは、新しい環境に苦労しましたが、しばらくすると飯室全体の主婦会の会長になるまでに活躍しました。当時の飯室で、スマは有名人だったようです。

スマは大変活発な画家でした。戦後、スマが俊の家を訪ねたときのことで。当時の俊と位里の家は険しい崖の上に建っていました。崖の上にはフキノトウがなっていました。崖の陰しさから誰も取ろうとしません。しかし、周りの止める声を聞きながらも、スマは平気そうに崖を登り、フキノトウを両腕いっぱいに取りました。このとき70歳を過ぎていました。スマのこうした豊かな心が、後ののびのびとした描き方につながっているのかもしれない。

位里を想う親心

丸木家の家運が傾いた際、美術の道に進む位里が原因だと考えた親戚たちは、影響が及ぶことを恐れ、位里を勘当させようとした。スマはそれに臆さず、「よそさまの財産をあてにするような子じゃありません。」と言って、親戚とのつながりを切ってしまいました。スマの位里を思う気持ちや、度胸の強さを感じられます。



《題名不詳》個人蔵



スマは、ひよんなことから絵を描き始めました。70歳を過ぎてからのことです。戦時中、丸木家では、満州で現地召集を受けたスマの息子に宛てて寄せ描きをすることになりました（あやは戦時中ではなく戦後すぐのことと記憶しているそうです）。それまで絵を描いてこなかったスマは、庭で拾ってきた石に墨をつけ紙にぺたんと押し、足を生やしてねずみを描いたのです。これをきっかけに、スマは絵を描くようになりました。



点をつなぎ合わせて描いています

それまで筆を持ったことのなかったスマにとって、線をひくことですら初めての経験でした。ある日、位里の妻の俊がメバルを持てきます。赤い鱗で包まれたメバルはスマの目にどのように映ったのでしょうか。スマはそれを線ではなく色とりどりの点をつなぎ合わせて描いたのです。スマは大変楽しそうに雑記帳やら広告の裏に絵を描いていたそうです。最初は家族で笑っていた作品も、半年経つ頃には県展で賞に入るようになり、ついには個展を開くまでに上達しました。



《鳥》個人蔵

私の見方

(プロジェクトメンバー・新宅麻由)

スマさんののびのびとした絵を見ていると、自由で常識にとらわれない魅力に引き込まれます。私は周りの人に比べて絵を描き始めるのが遅かったのですが、スマさんの絵を見て、絵を描き始めるのに年齢は関係ないのだと勇気づけられました。

参考文献:大道あや『へくそ花も花盛り 大道あや聞き書き一代記とその絵の世界』福音館書店、2004年、122～124頁。
丸木位里、赤松俊子『絵は誰でも描ける』室町新書、1954年、47・48頁。
丸木スマの調査については、小田芳生様、妙子様にご多大なご協力をいただきました。

参考文献:大道あや『へくそ花も花盛り 大道あや聞き書き一代記とその絵の世界』福音館書店、2004年、275～278頁。

ひょうげん スマさんの表現、やってみた！

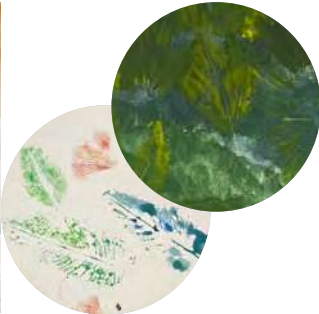
スマさんのアイデア溢れる表現にプロジェクトチームが挑戦してみました！

お押し葉

本物の葉に絵の具をのせ、それを紙に押し付けるといったスマの技法を使ってみました。



《夕焼け》新宅麻由
アクリル絵の具、葉、色紙



《ふるさと》原田真日瑠
アクリル絵の具、葉、色紙

○制作手順



- ①葉の裏側に絵の具を塗る
- ②絵の具を塗った葉を画面に押し付ける
- ③はがすと完成！

私たちの見方

(プロジェクトメンバー・新宅麻由、原田真日瑠)

筆のみで描くのではなく、実際の葉を用いて描くことでより生き生きとした作品になりました。こういった方法で描くことは、筆で描くことに慣れていなかったスマさんだからこそその発想だったのではないかと思います。この技法であればどんな人でも楽しんで絵が描けるのではないかと感じました。

すみとクレヨン

スマさんの墨とクレヨンを用いた表現を再現してみました。



《りんご》大谷七海
クレヨン、墨



《牡丹》大谷七海
クレヨン、墨

墨が強すぎて納得
いかなかった作品です

○制作手順



- ①クレヨンで絵を描く
- ②絵の上に墨を流す
- ③乾かすと完成！

私の見方

(プロジェクトメンバー・大谷七海)

クレヨンで描いた絵の上に墨をのせる。この手順は非常に簡単なのに、絵にしようと思うと意外と難しいです。今回挑戦してみて、はじめに《牡丹》を制作したのですが、墨の効果が強すぎて暗い印象になってしまいました。2度目にやった《りんご》は、スマさんの絵を意識して、背景に墨がつくようにしました。すると、絵の明るさはそのままに、浮き上がったような墨の表現が楽しい絵が完成し、スマさんの作品に少し近づいたと思います。実際にやってみて難しさを実感することで、スマさんの表現のテクニックに対する理解を深めることができました。

もっと知りたい！飯室の芸術家たち

芸術家たちを知る関係者の方々の証言

令和4年11月20日に飯室の芸術家たちをテーマにしたトークイベントを開催しました。このページでは、その際に飯室の芸術家5人にゆかりのある方々からお聞きした、飯室の芸術家たちに関するエピソードをまとめています。

丸木位里



うるかとアユが大好きでよく持って行けと言われ、持っていくと喜ばれました。

「友達は一人数でも多く作れ。特に自分を大切にしてくれる人は特に大切にしろ。嫌な人は避けなくて向かっていくとかげがえのない友人になる」と言ってくれました。

私のお母さんが位里さんと同級生でした。遠足の時にお母さんは位里さんに負ぶって連れて行ってもらっていたそうです。

苦手な人とも向き合うことが大切だという位里さんの考え方、とても素敵です。

私も、周りの人の良いところを見つけながら、日々を過ごしたいです。

(担当メンバー)

丸木スマ



加計によくきて絵を描いていました。スマさんがくるといろんな人が来ていました。

新聞記事で「この年でここまで話すのは珍しい」「絵に力がある」と言われていました。

周りを明るくするようなお人柄がわかる、貴重なお話が聞けてとても嬉しかったです。

(担当メンバー)

先を見ることが出来る人でした。



大道あや

今を生きる人から直にお話を聞き、あやさんの存在を近くに感じることができました。

(担当メンバー)

わたしの家にも中谷さんの絵があるんですよ。

中谷ミユキ



今までそんな有名じゃない、知っている人は知っているけど知らない人は知らなかったから、今回みんなに知ってもらえて中谷ミユキさんにも喜んでもらえるんじゃないでしょうか。

私も「実はあれもミユキさんの作品」という驚きを皆さんと味わえて楽しかったです。

(担当メンバー)

とにかく山が好きで好きで、朝から姿が見えないと思うと山へ絵を描きに行っていました。

高度経済成長期に車がいらなかったのかと問うと、もし事故で手をケガしたら、絵が描けなくなるじゃないかといっていました。私は歩いた方がいいと。

朝・夜関係なく山へ行って写生をするというお話など、山を描くことにかける情熱などを感じられるお話がたくさんでした。

(担当メンバー)

佐々木邦彦



長男だったが家を継がず弟が継ぎました。「財産なんかは何もいらんから絵をやる」といって京都に出て行きました。



私たち「丸木位里と故郷・飯室をつなぐプロジェクト」は、令和3年度より「広島大学 地域の元気応援プロジェクト」に採択され、活動を開始しました。ここでは、私たちの活動についてご紹介します。

作品調査

飯室に残る丸木位里を中心とした飯室の芸術家たちの作品や、芸術家たちの飯室にまつわるエピソードなどについて、文献や飯室の人々からの聞き取りなどをもとに調査を行っています。



調査を行うプロジェクトチーム

情報発信

丸木位里や飯室の芸術家たちについて、講演会やパネル発表を開催したり、パンフレットの配布を行ったりするなど、飯室に住む人々をはじめとして、広く情報発信を行っています。



トークイベント「位里と飯室の芸術家たち」での学生の発表

ワークショップ

平和と芸術を多くの人に身近に感じてもらうことを目的とした活動にも取り組んでいます。令和4年度には、8月6日にアートを通して平和について考えるアートイベントを開催し、ワークショップを行いました。



平和について語り合いながら作品をつくるアートワークショップ「in-to」



ここまでで紹介してきた芸術家たちが、同じ飯室というまちから生まれ、それぞれに花開いたこと、そしてそれが同じ時代であったということ。これは実はとても貴重なことなのではないかと、このプロジェクトを通して何度も体感しました。この飯室の芸術家たちが、よりたくさんの人にとって大事なものになっていくために、皆さんと一緒に大切にしたいことがあります。

作品とともに生きる

飯室には、小学校、中学校、公民館、寺社など、この町で育ち暮らしていく生活のすぐそばに多くの作品があります。これらの作品すべてが飯室で制作されたわけではありませんが、見ていると、不思議と飯室の風景や情景が思い起こされます。作品が、芸術家たちの生まれ育った飯室の地にあるということ、作品と飯室の人々がともに生きているということが、そう感じさせてくれるのだと思います。暮らしのすぐそばで触れることのできる飯室ゆかりの作品が、この場所で大切にされ続けてほしいと思います。

まだまだ眠っているかもしれません

飯室を語り継ぐ

たくさんある作品も、時間が経ち、誰も見向きもしなくなれば、忘れられてしまいます。ここに作品があること、飯室の地にたくさんの芸術家が生まれたことを語り継ぐことが大切です。あなたの知っていること、あなたが作品を見て感じたことを、ぜひ作品の前で身近な人と話してみてください。

芸術を楽しむ

美術館に行ったり、作品を見たりすることもそうですが、一番よいのは、実際に自分で何かつくってみることで、スマが晩年に制作を始めたように、芸術は、いつからでも、そして誰であっても始めることができます。もしかすると、次の芸術家はあなたかもしれません。



画家・丸木位里と

飯室の芸術家たち

2023年2月28日印刷

執筆・編集 広島大学教育学部造形芸術系コース学生有志

表紙・裏表紙, p.12, p.13, p.22, p.23: 江村健真、挿絵, p.10, p.11, p.20, p.21: 森川美優、マップ, p.8, p.9: 堀部美有、p.2, p.3, p.6, p.7: 小田彩恵子、p.14, p.15, p.18: 新宅麻由、p.16, p.18: 原田真日瑠、p.17, p.19: 大谷七海、監修: 多田羅多起子

この冊子は令和4年度広島大学地域の元気応援プロジェクト採択事業「丸木位里と故郷・飯室をつなぐプロジェクト—芸術の力と平和発信—」の一環として作成したものです。



地域の元気応援プロジェクトについてはこちらから ▲